

点を考慮した学習指導を行なうことは、必ずよい結果をもたらすにちがいない。こういう意味で、学力検査問題にあらわれた問題点は、学習指導の問題であり、その子どものつまずきを救う方法が望ましい学習指導法である。

これらの国語、算数・数学の報告書は都合によって昭和36年度に刊行する予定である。

B 望ましい学習指導法の実証的研究

a, 目的

「診断的性格を帯びた福島県で標準化した学力検査問題」の実施の結果を誤答分析し、学習のつまずきを通して考察した国語科の「望ましい指導法」の実証的な研究を行ない、国語科の学習指導法を確立し、児童生徒の学力の向上を図ろうとする。

- (1) 研究は、国語の基礎的な能力となる「文字、語い、ことばのきまり、読み解」における指導法を主たる対象とする。
- (2) 指導に当っては、改訂指導要領に示された項目、A、聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと、B、ことばに関する事項のすべてを内容とし、学習活動は、それぞれ有機的総合的に展開できるように計画する。

b, 対象学年および実験学校

- (1) 国語科としてのやや高度な態度や技能を必要とする5年生として、小・中学校に通じる指導法を確立する。
- (2) 調査票に基づいて選定した学校を福島県教育調査研究所規則第三条によって実験学校とし、実験の学級の担当者を同規則第六条によって研究員とする。

実験学校および研究員は次のとおりである。

学 校	校 長	研究員
信夫郡信夫村立平田小学校	渡辺 英治	石原 謙
〃 大森小学校	佐藤 勝称	阿部 列
伊達郡飯野町立飯野小学校	阿部 小平	鳴原 盛寿
〃 青木小学校	寺島 友吉	穂積 彦司
〃 川俣町立鶴沢小学校	菅野 秀夫	高橋 勇雄
〃 小綱木小学校	渡辺 吉治	大河原 泰
〃 山木屋小学校	羽田 隆治	中山 実
信夫郡松川町金谷川小学校	武藤 俊雄	今野 剛光
〃 飯坂町中野小学校	本田 仁一	伊藤 利夫
安達郡安達町上川崎小学校	加藤 昌三	曾山 賢一

c, 研究の方法

- (1) 年間指導計画、単元指導計画は研究所において作成し、研究員が、その学習指導に当る。
- (2) 指導法の打合会は原則として毎月上旬に行い、学期はじめは研究所で、その他は実験学校における研究員の授業を参考しながら行う。
- (3) 研究員は指導記録をとる。
- (4) 実施にあたっては実験学校および研究員は平常の教育活動をそこなうことのないよう考慮する。

d, 仮説としての望ましい指導法

- (1) 現在の指導の弱み

今まで行なわれた全国学力調査や診断テストで、あるいは授業の観察で次のようなことが指摘できる。

- 文脈に即して語句の意味を読みとること、および文・文章を相互の関係から読むこと。
- 段落を正しくとらえること。
- 問題意識をもって読むこと。

こうした読みの操作で要点をとらえ、主題や意図を読みとることに問題がある。

子どもの受験や授業の態度では、問い合わせ本文にかえして確かめること、および文（表現）に即したとらえ方をすることを疎遠にして、記憶を手がかりとして内容に反応する。したがって、授業は教師の問い合わせに従って内容のあてっこをし、くみとったものの言い合いを展開していくにすぎない。

この授業がいかに活発であっても自分で読みとる能力が養われるであろうか。国語のねらいとするものは「内容そのものの理解」というより、内容を「文・文章のしくみやことばの働きから読み」という操作にある。内容を理解できたということには、その後に適応する技能は存在しないが、読みの手順がわかるということには、その後にじゅうぶん適応する能力が養われることになる。

(2) 指導の構想—読み解指導を中心として—

文章を正しく理解するためには、作者の原体験を表現の過程から追体験することがたいせつである。このためには次のような過程の中で、次のような取り扱いが要求されるものと考えられる。

① 主題を仮定する。

どんな長い文章であっても、全体像を見通すために最後まで読まなければならない。そして、いったい「何が書いてあるか」ということで全一的なとらえ方をする。あるいは感想を求めるこどもよい。子どもの発言を尊重して、主題や意図を仮定するのである。この仮定は、その後の読みの方向を決定するだいじな要素であり、読み全体を支配する問題意識である。

② 音読する。

音読の意味はいろいろある。読み解き目的とする場合、正しい読み方を全員で確かめることにねらいがあるので、すらすらとじょうずに読めることまで強い要求は不要ない。むしろ、読みの過程で語いがわからないため、あるいは、文字がわからないため、または文節意識がないために読みの抵抗があるかどうかを判断するように考えていくべきである。

③ 大意をまとめる。

大意は5W 1Hを適応することがよいようである。「あらすじ」「あらまし」がこれであって、要旨とははつきり区別したい。高学年であれば、わざわざ板書するまでもなく、段落わけと共に全体をとらえるようにすることを提唱したい。

④ 文章のしくみを考える。

主題に従って、どのような構想で叙述されているかを